

J. F. Oberlin

桜美林大学

環境報告書

2025年度版



はじめに

この度、桜美林大学では、2018年度以来7年ぶりとなる環境報告書を発行する運びとなりました。この間、社会においては新型コロナウイルス感染症（以下『コロナ禍』という。）の蔓延による社会システムの再構築が進み、また、地球規模での気候変動や資源制約が深刻化しました。このような中、大学として持続可能な社会の実現に向けた取組を記録し、公開することが重要であると考えます。

これまでの環境報告書は桜美林大学環境研究所が編集・発行してきましたが、本学の改組に伴い環境研究所が廃止され、環境報告書の作成も中断していました。そこで、今般の環境報告書は、学生主体で企画・編集を行い、学内各部署および教員の皆様のご協力を得て作成しました。

本学においては、2019年4月に新宿キャンパスが、また2020年4月に東京ひなたやまキャンパスが開設されるとともに、2023年4月に多摩アカデミーヒルズ（多摩キャンパス）の新校舎が開設されるなど、学群の分散化が進みました。これをふまえて、本報告書では、町田キャンパスだけでなく桜美林大学全体を対象に、資源の利用や環境負荷の現状と対策、大学における環境の学び、社会貢献など、多角的な視点から本学の環境活動を取りまとめました。本報告書が、桜美林大学の環境への歩みを振り返り、未来への新たな一步を共に考える契機となれば幸いです。

目次

学長からのメッセージ	2
桜美林大学のエコキャンパスに向けた現状と取組環境負荷	
エネルギー使用量・CO ₂ 排出量・水使用量・廃棄物排出量・リサイクル率	3.4
●町田キャンパスエコマップ	5.6
●4キャンパスのエコ施設と取組	7.8
桜美林大学での環境の学び	
●ECO-TOP プログラム、卒業生インタビュー	9
●探究サービスラーニング（農業とリベラルアーツ）	10
桜美林大学の環境に関する社会貢献	
●こどもサイエンス教室・境川クリーンアップ作戦	11
●探究サービスラーニング（多文化共生）	12
環境報告書へのコメント	13
イラスト協力者からのコメント・編集委員会の活動・編集後記	14

桜美林大学の概要・環境報告書基礎的事項

環境報告書の目的：桜美林大学の環境保全に関する取組を在学生、教職員、桜美林学園と関わりのある全ての方々に報告するものです。

報告対象組織：桜美林大学の全キャンパス

報告対象期間：2024年度の環境負荷データや環境保全活動を対象としています。発行は2025年度のため「2025年度版」としました。

製作・編集：桜美林大学リベラルアーツ学群藤倉ゼミ内環境報告書編集委員会が桜美林学園広報課、施設・管理部ほか関係部署の協力を得て製作しました。教育活動や社会貢献活動は、学生編集委員が情報を収集し、インタビューを依頼して受諾いただいたもの等を掲載しています。したがって、桜美林大学の全ての活動を網羅しているわけではありません。

学生数

学群	10,589
大学院	221
合計	10,810

教員数

専務	290
非常勤	676
合計	966

職員数

専務	203
非常勤	115
合計	318

（2024年5月1日現在）

学長からのメッセージ

カスタマイズを
よりダイナミックに—

桜美林大学学長

畠山 浩昭



桜美林大学の環境への取り組みは、大学単独ではなく、学校法人桜美林学園全体の中長期的なビジョンのもとで進められています。2024年度の事業計画書では、国際連合の総会で採択された「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs）」への取り組みを強化する視点を盛り込むなど、学園全体での取り組みが続いている。その上で、大学としての活動や価値を、社会に可視化することの意義はますます高まっています。

このような組織的な取り組みに加え、私自身がもっとも重視しているのは、「個人の意識」です。大学は教育の場であり、学生一人ひとりが環境問題を「自分ごと」として捉えられるようになることが、持続可能な社会への第一歩です。ごみ、フードロス、健康、多文化社会といった日常的なテーマに環境問題が深く結びついていることに気づき、自分の行動を省みるきっかけを持ってほしいと願っています。

コロナ禍を経て強く意識されるようになった「多様性」の価値は、環境教育にも新たな視点をもたらしました。100人いれば100通りの学びがあるように、環境への関心やアプローチも人それぞれ。だからこそ、一人ひとりの価値観を尊重しながら、環境問題を「自分ごと」として考える土壤を育てることが重要なのです。

そういった観点からもECO-TOPプログラムや境川クリーンアップ作戦への参加などは、まさに学生たちの主体的な取り組みの象徴といえるでしょう。施設整備による省エネなど、学園としての努力も続けていますが、「学生が動いている」という姿こそ、多くの人の

共感を生む力があります。本学での学びにおける強みは“さまざまな学問領域を自身でカスタマイズできる”という点です。学生一人ひとりが、学びの幅を広げ、カスタマイズをよりダイナミックに行い、環境問題をはじめとした社会課題を多角的に考え、行動できる人材の育成を目指します。

また、今回の環境報告書は、学生が主体的に作り上げるという試みです。「環境問題」という多くの学問領域に関連する複雑な情報を、若い感性でどう読み解き、発信していくか。そのプロセス自体にこそ、大きな意味があります。一人ひとりの「こんな社会にしたい」という思いが、未来の環境をつくる力になると信じています。どんな報告書になるか、私もワクワクしています！

桜美林学園 2024年度事業計画書（抜粋）

IV アクションプラン

10. 地域・社会貢献

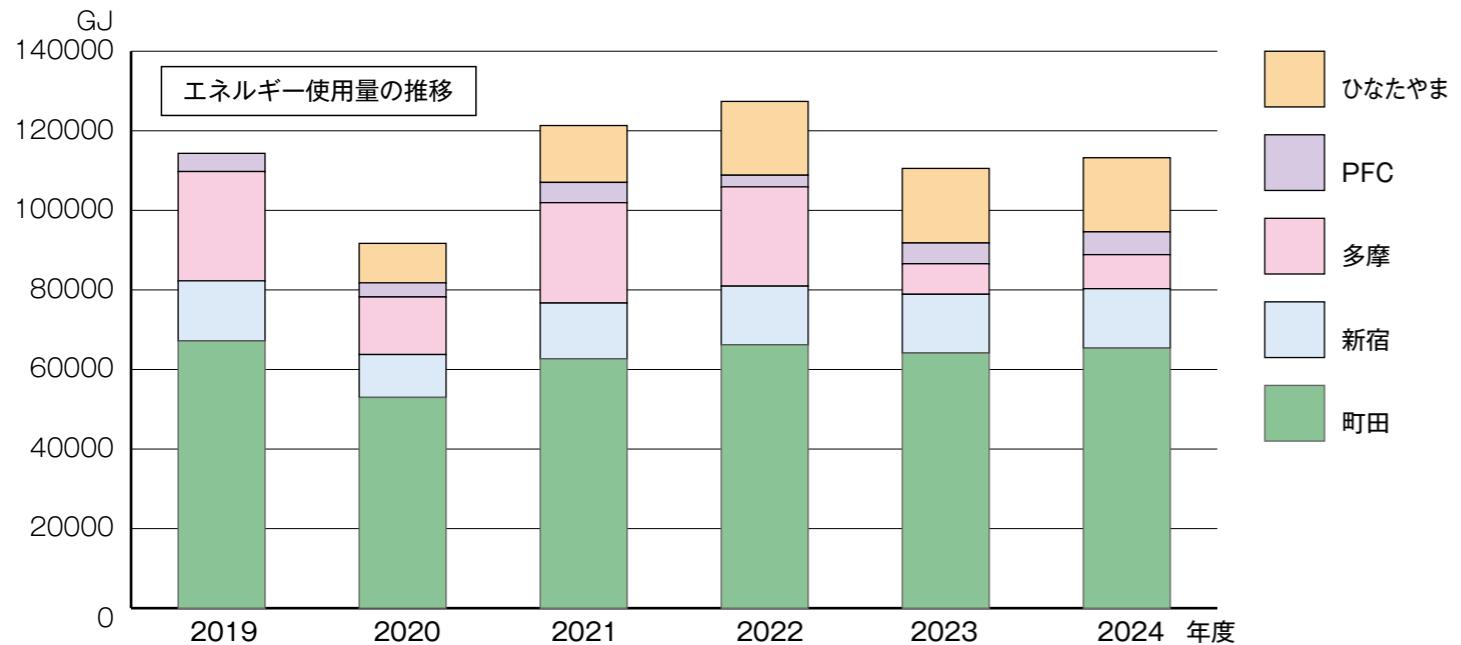
（中略）サイエンス教室の開催といった本学の理念や特性を生かした取り組みやイベントを通じて、教育・研究活動の具体的な成果を地域社会へ還元し、地域連携の強化を行う。

13. キャンパス整備

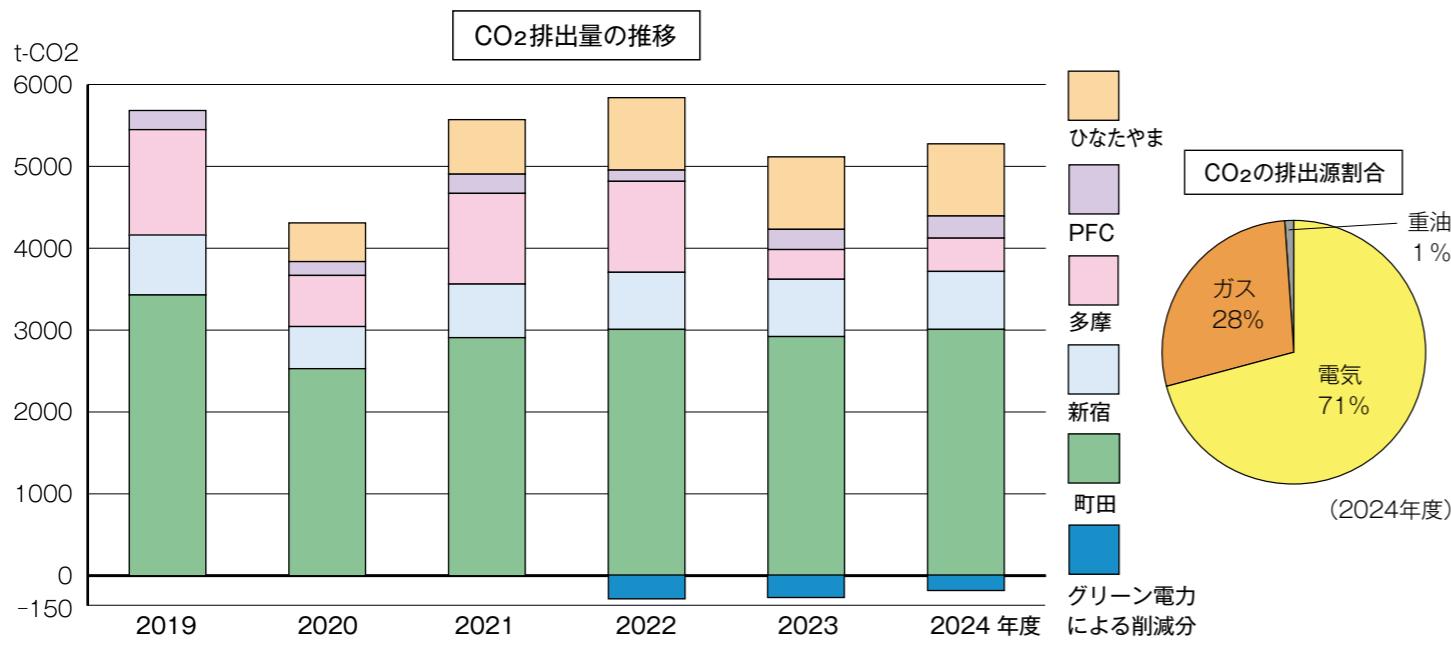
（2）施設・設備の長寿命化（中略）を目指すため、LCC計画に従い修繕実施を図る

（3）環境貢献のため、各種の計画に従い良質な空調設備機器の導入と整備費用の平準化を図る

■ エネルギー使用量・CO₂排出量



桜美林大学全体でのエネルギー使用量の推移をみると、2020年度はコロナ禍により大半の授業がオンラインになったため、エネルギー使用量は約28%減少しました（ひなたやまキャンパスを除く）。その後、対面授業の再開に伴い2022年度までは増加しましたが、2023年度には大きく減少しました。これは多摩キャンパスの使用量の減少が主な要因となっています。多摩キャンパスでは、校舎及び寮の建て替えによりエネルギー使用量が大きく減りました。2023年度からはPFCに教育探究学群が入ったため、学生の増加についてエネルギー使用量は少しずつ増加しています。2024年についてキャンパスごとの割合を見ると、学生数の最も多い町田キャンパスで全体の約57.7%を占めていますが、学生一人当たりにすると全キャンパスの平均値よりも少ないです。



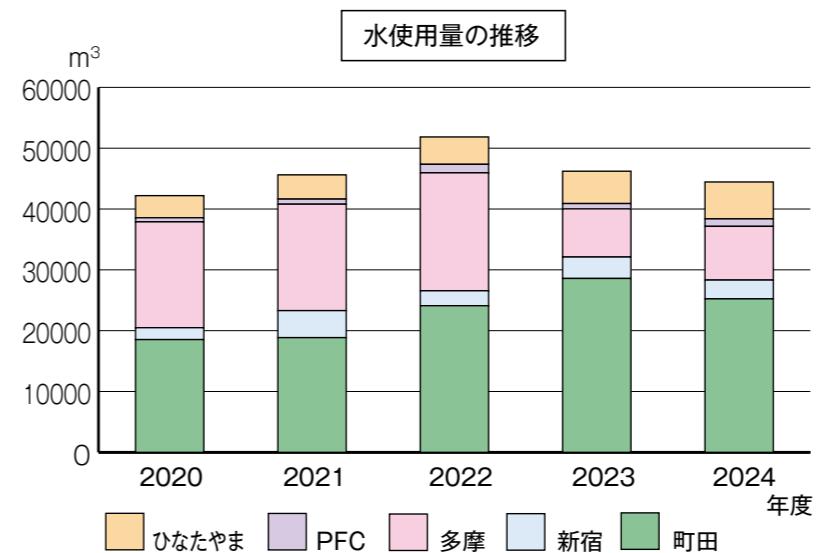
桜美林大学全体の二酸化炭素(CO₂)排出量の推移をみると、全体では2020年度に、多摩キャンパスでは2023年度にCO₂排出量が減少しており、エネルギー使用量と同様にコロナ禍による授業のオンライン化や、多摩キャンパスの建て替えが主な理由としてあげられます。

2022年1月から町田キャンパスの東ゾーンではグリーン電力を導入しています。そのため、「グリーンエネルギーCO₂削減相当量認証制度」を利用して町田キャンパスのCO₂排出量は毎年およそ100t削減されています。

また、スクールバスによるCO₂排出量に関しては、新型コロナウイルスが蔓延した年度以外に大きな変化は見られませんでした。スクールバスのCO₂排出量(2024年度)は約354tで、町田キャンパス全体の約7%でした。

CO₂の排出量の割合は電気が多くを占めています。ガスは主に空調や厨房、重油はボイラーに使用しています。

■ 水使用量・廃棄物排出量・リサイクル率



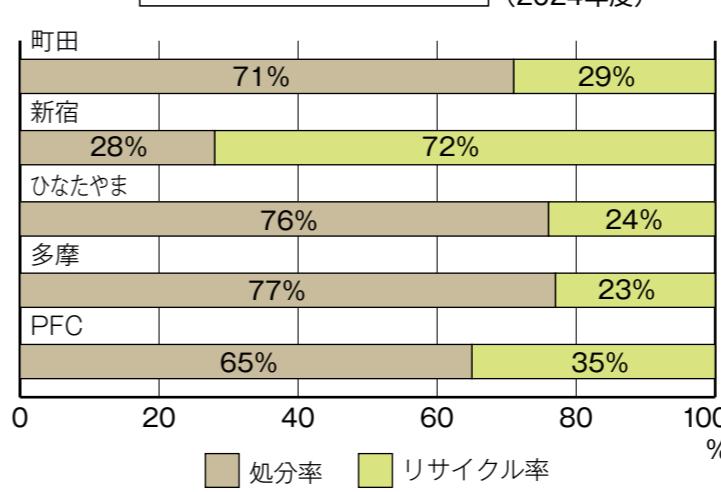
水使用量については、データの揃う2020年度からとしました。

キャンパスごとにみると、町田キャンパスは、2020年度と2021年度はコロナ禍に伴うオンライン授業でしたが、対面授業の再開に伴い使用量が増加しています。なお、2024年度は、対面授業の定着により全体の使用量が減少したと考えられます。

新宿キャンパスは、キャンパスが本格稼働したことや新型コロナウイルス対策の衛生管理強化で2021年度の手洗い・消毒・清掃が増えたことで水使用が増加しましたが、2022年度は、厳格であった感染症対策（頻繁な手洗いや清掃）が出口戦略に向けて緩和されたことで水使用量が減少したと考えられます。

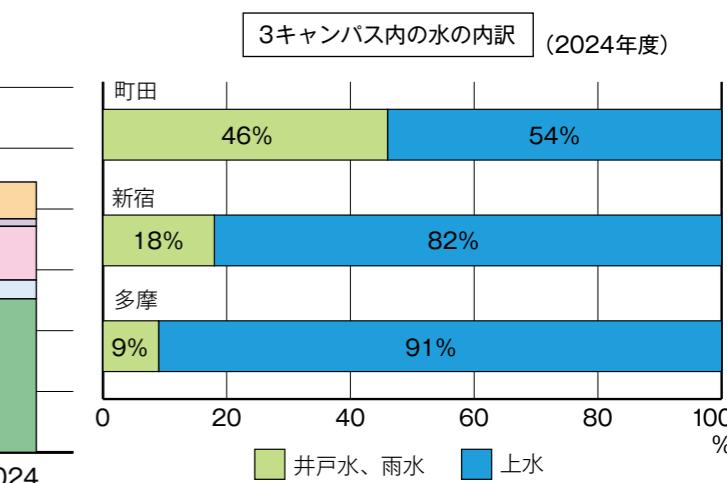
多摩キャンパスは、2023年度に校舎及び寮が新築に移行したこと、雑用水に井戸水を使うようになったことから、大きく減少しています。

キャンパス毎のリサイクル率 (2024年度)



大学で排出される廃棄物の2024年度のリサイクル率をキャンパスごとに比較すると、左図のとおり、新宿キャンパスのリサイクル率が72%と、他キャンパスと比較して高くなっています。これは、新宿キャンパスでは粗大ごみの排出がないため、リサイクルできる廃棄物の割合が高いからと考えられます。

また、町田キャンパスについて、ごみの種類ごとの排出量の推移をみると、右図のようにコロナ禍が終り対面授業が復活した後も排出量は減少を続けています。粗大ごみやプラスチックごみが減少傾向にあるためと考えられます。町田キャンパスで排出される紙(OA紙)、新聞紙・雑誌、ダンボール、びん・かん、ペットボトルのリサイクル率100%です。町田キャンパスでは、新入生が入学する春学期に、大型ごみ箱の側に分別指導員を置いて、分別に取り組んでいます。





1 ナツグミ



4 5 8
9 11 12 LED照明

白熱電球に比べて変換効率が優れたLED(発光ダイオード)照明は、省エネであることと加えて、省資源性、廃棄物の発生抑制などの観点からエコであるためキャンパス内の取り換え作業が促進されています。

トイレットペーパー

学内でリサイクル用に回収された書類等の紙資源はキャンパス内のトイレで使われるトイレットペーパーとして利用されています。



1 ハイブリットバス

町田キャンパスから多摩センターと淵野辺を行き来する計14台のバスのうち3台がディーゼルエンジンと電池・モーターを組み合わせたエコカーである「ハイブリットバス」です。

太陽光パネル

一粒館には太陽光パネルが設置されており、温室効果ガスを排出しない発電方法を実施しています。



人感センサー

人を感知して照明のオン・オフが自動で行われる人感センサーは電力消費を効率化して省エネに多大な貢献をしています。



7 クサボケ

1	スクールバス発着場所
2	一粒館
3	学而館
4	明々館
5	太平館
6	崇貞館
7	栄光館
8	碩学館
9	荊冠堂
10	理化学館
11	旧体育館(更賜体育館)
12	待望館



10 大気環境ステーション

理化学館屋上では、気象のほか窒素酸化物などの大気汚染物質濃度を24時間測定しています。



3 コボタンヅル



2 ウグイスカグラ

2 3 4
6 7 10 ガスヒートポンプ・エコアイス

液体が気化すると周囲の熱を奪い、気体が凝縮して液化すると熱を発生させる性質を利用して圧縮機をガスエンジンで駆動するガスヒートポンプは消費電力を大幅に削減できる空調システムです。



4 5 6 7
8 11 12



グリーン電力

明々館、太平館、崇貞館で使われる電気は発電時にCO₂を排出しない再生可能エネルギーによって発電されたグリーン電力によって賄われています。



6 アオキ

3 4 10 屋上緑化

町田キャンパスの学而館・明々館・理化学館では屋上緑化を実施しています。屋上に芝生や草花、低木を植えることで、ヒートアイランド現象の緩和や断熱効果の向上、雨水の調整効果や生物多様性の保全効果が期待できます。



分別ごみ箱

町田キャンパス内のごみ箱は色や設置方式を統一するなどしてごみ分別への啓発を促す工夫が施されています。

10 地中熱利用

理化学館では地中熱利用を導入しており、地面の中にある一定温度を保った熱エネルギーを冷暖房システムに利用することでエネルギー利用の効率化を図り、省エネに貢献しています。

9 10 雨水利用

雨水を貯めてトイレの洗浄用水、消防栓として利用しています。



4 コケリンドウ

地下水利用システム

明々館・太平館・崇貞館では掃除用途の雑用水やトイレでは地下水を利用しています。地下水を利用することで水道インフラの負担を減らすほか、災害の水源確保につながります。

4 5
6 10



3 10 システム

学而館と理化学館では、1階と上階の温度差を利用して、冷暖房時に吹き抜け空間の空気循環を行うことでより空調を効率化しています。

多摩アカデミーヒルズ



啓発ポスター

ごみ箱には学生が作成したごみ分別を促すポスターが張られています。学生が回収事業者の方にヒアリングしたところプラスチックごみの分別ができるおらず、また寮で出されるペットボトルの捨て方についても多摩市から指導されたこと受けて、掲示されました。



2023年度より井戸水の利用を開始しました。旧多摩アカデミーヒルズ時代に井戸ポンプはあったものの壊れたため、新棟建設に伴い新たに配管されました。



ガスヒートポンプ

空調設備はEHP、GHPが使われており、基本的にGHP。センターナリホールのように一気に空調温度を変化させたい場所のためにEHPが使われています。
※GHPはガスエンジン、EHPは電気モーターで駆動させる点が主な違いです。



太陽光パネル

約15m²の大きめのものが一台あり、月平均約85,000kwhの電力を使用している新宿キャンパスでは年間の電力使用量の約15% (11,000kwh程度)を太陽光パネルによる発電で賄っています。



見える化

中央監視室では、太陽光発電による発電量やCO₂削減量がリアルタイムで可視化できるようになっています。



新宿キャンパス



雨水利用

新宿キャンパスでも町田キャンパスと同様に雨水利用施設があり、主にトイレの水などに利用されています。

壁面緑化

壁面緑化は入口側一面になされています。植物は複数の種類が用いられています。植物を複数用いている理由としては、多様な環境への適応性や病害虫や気候変動へのリスク分散、生態系の形成と生物多様性の促進、水分や栄養の利用効率の向上、景観・デザイン性の向上などが考えられます。



スマートマルチ GHP+EHP

キャンパス内の空調に関しては、ガスヒートポンプ(GHP)式と電気モーターを圧縮した冷媒方法を持つ電気式ヒートポンプ(EHP)の二つを併用しています。これら二つを使うスマートマルチは空調を使いすぎた際、EHPからGHPへ転換することで温度変換効率を高め、自動で省エネ化が行われるシステムです。この仕組みにより、電力ピーク時の最大電力が抑えられます。



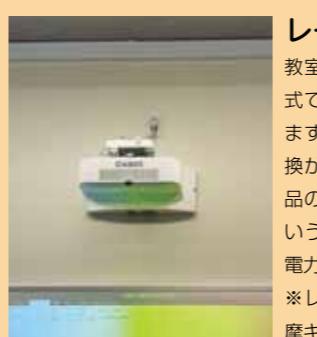
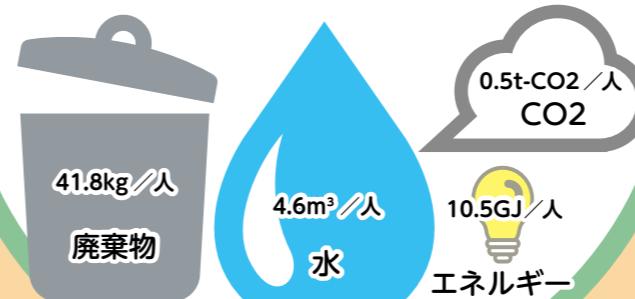
館内の照明はLED100%!

エコガラス

キャンパス内にある窓ガラスは北面を除くすべてがエコガラスです。エコガラスとは、ペアガラスの内側にLow-E膜をコーティングすることで、断熱性能、遮熱性能をさらに高めているものです。

学生一人当たりの使用・排出量(2024年度)

町田キャンパス

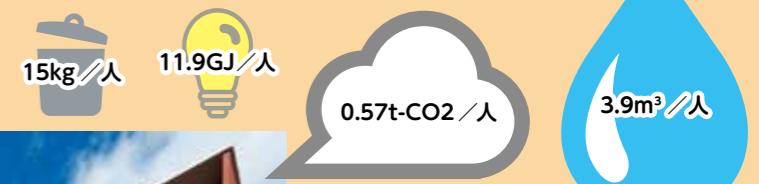


レーザー式プロジェクター

教室では、プロジェクターはランプ式ではなくレーザー式を使用しています。レーザー式は頻繁なランプ交換が不要であるため、廃棄物や消耗品の製造エネルギーが削減されるというメリットに加え、使用時の消費電力が少なく省エネです。
※レーザー式のプロジェクターは多摩キャンパスでも使用されています。



東京ひなたやまキャンパス



ひなたやまも館内LED100%!



キャンパスを取り囲む木々

東京ひなたやまキャンパスは、以前、小中学校の校舎があったところに新設されました。建て替えの工事の際に、キャンパス周辺の樹木は、建物を建てるうえで支障のないものは極力残した設計となっています。これら既存樹の中には桜の木もあり、キャンパスを囲んでいます。

各キャンパスのエコ施設・学生一人当たりのエコ度比較

町田キャンパスには学園本部があるなど職員数には偏りがありますが、ここでは全て学生数のみで原単位を算出しています。



プラネット渓野辺キャンパス



空調の自立運転システム

JR渓野辺駅に隣接するPFCは、災害時の帰宅困難者一時滞在施設に指定されているため、空調に関してはバッテリー搭載型の自動運転機能が搭載されています。これは災害時、電気が止まっても、ラウンジの空調が稼働することができる仕様となっています。



1.32t-CO2/人



6m³/人



28.0GJ/人



PFCの屋上緑化が実はすごい！



観察したキャンパスの中で最も整備されていてとてもきれいです！



PFCもスマートマルチ GHP+EHPを使っています！

手動による空調管理

PFCは収容人数及び教室の数が他キャンパスに比べ少ないため、日頃のキャンパス内の空調に関してはタイマー設定などではなく、すべての調整を手動でのみ行います。人の少ない土日や祝日にに関しては空調をより無駄なく管理することができエコです。



もちろんスマートマルチでエコ！



桜美林大学での環境の学び

ECO-TOPプログラム

ECO-TOPプログラムとは、東京都の人材育成・認証制度であり、本学は2009年に都の認定を受け、2010年からプログラムを始めています。ECO-TOPはEcological Conservation -Training of Personnel Programの頭文字をとったものです。これは「自然環境保全のための人材育成プログラム」を意味します。

特定分野に特化した専門家ではなく、分野をまたぐ視点を持って仕事ができる人材育成を目指します。自然科学分野、人文科学分野、社会科学分野の科目をバランスよく履修して、企業・NPO・行政へのインターンシップを経験することで資格を取得できます。

ECO-TOPプログラム修了生インタビュー

岩崎光夏さん (2025年3月修了・大学卒業) 大山隠岐国立公園アクティビレンジャー

ECO-TOPプログラムに挑戦したきっかけは何ですか？

もともとメジャー（主専攻）は環境学ですが、授業を受けていく中で、環境問題と一概に言っても地球温暖化から生物多様性の保全まで幅広いことがわかり、自分が何に関心があるのかを探っていました。そのような時期に、環境に関わりのある行政、民間、NPOの3分野でインターンシップを経験できる点に魅力を感じたからです。

ECO-TOPプログラムに挑戦してよかったことは何ですか。現在の仕事にも活かされていますか？

異なる3分野のインターンシップを体験することで、環境への多様な関わり方を学び、視野が広がりました。例えば、東京都環境局での高尾山の登山道を巡回するという経験は、登山道の管理という自然を利用し、かつ保全するという今まで体験したことのない自然への関わり方を学びました。

また、ECO-TOPプログラムでは発表の機会も多く、物事の全体像を短時間で把握してまとめる要約力が身に付いたと思います。プログラム全体を通して積極性や忍耐力も培われました。

これらは、現在の仕事でも、環境省直轄の施設の巡回を行う際や地域の方とコミュニケーションを取る際にとても活かされています。



ECO-TOPプログラムの主な科目



外来種の除去作業中の岩崎さん



合同インターンシップ報告会での岩崎さん

ECO-TOPプログラムを通して、環境に対する意識や行動の変化はありましたか？

産業廃棄物処理会社のインターンシップでは、廃棄物の処理場に実際に足を運んでみて、自分が捨てるごみが地球環境に負担になっていることを改めて実感し、意識が高まりました。現場を見ることが「気づく」きっかけになると思います。このような機会があるところもこのプログラムの良い点です。

国立公園レンジャーという仕事との出会いは？もともと環境関係の仕事に就きたいと思っていましたか？

最初は、環境学なら就職活動に活かせるだろうくらいの気持ちで選びました。しかし ECO-TOP プログラムに限らず、授業を含めて学んでいく中で、「環境問題について知った以上は、それをないがしろにしたくない、自分も自然を守ることにつながる仕事をしていきたい」と思うようになってきました。

国立公園のレンジャーを目指したのも東京都でのインターンシップがきっかけでした。この出会いに感謝しています。

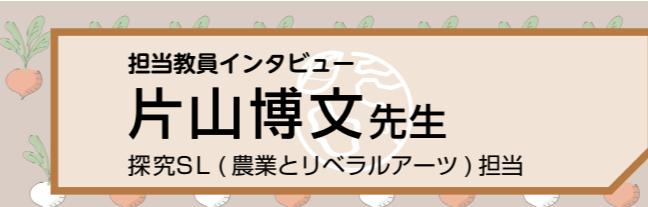


サービスラーニングの情報

探究サービスラーニング

サービスラーニング(以下「SL」)とは、創立者・清水安三が学園のモットーとして掲げた「学而事人(がくじじん)～学びて人に事(つか)える」を実践に移すための授業です。フィールドは大学近隣地域を始め、被災地や海外もあります。学生は、授業で学んだ知識を活かし、社会貢献活動(20時間)を行います。また、大学とフィールドを行き来することで、体験を伴った学習ができます。

探究サービスラーニングは、リベラルアーツ学群の選択必修科目です。



どんな科目ですか？

都市農業の現状について体験的に学びます。町田市、相模原市、八王子市の7つの農場で学外活動として農作業を行います。

農場ごとにグループで都市農業の課題にどのような貢献ができるかを考え、最終授業ではお世話になった農場の方々を呼んで発表会を行います。

この授業で学生はどのように成長していますか？

ボランティア先で社会課題に向き合い、解決しようとする人達と接し、彼らの「志」や「理想」、「成果」や「苦労」に触れることで大きな学びが得られます。特に、学生がボランティア報告書で「受け入れ先の人の思いを受け止めた」と書いているのを読むと、この授業をやっていて良かったなど実感します。

半年という短い期間では劇的な成長を期待するのは難しいかもしれません、「気づき」が確実に芽生える場面があるため、その経験は意義深いと感じています。



この科目を始めたきっかけは？

私は農業が専門ではありませんが、この授業を始めたきっかけは、東日本大震災と原発事故を経験し、自然と人間の関係について改めて考えるようになったことでした。

その中で、福岡正信の『わら一本の革命』に出会い、自然の生命力や農の在り方に強く影響を受けました。

また、最近ではアメリカの植物学者でネイティヴアメリカンのロビン・ウォール・キマラーの本からも、自然への深い理解や感性に刺激を受けています。特に「ポポウイ」という、キノコの爆発的な生命力を表す先住民の言葉に感銘を受け、そうした自然の力を「わかる」と感じられる若者を増やしたいという思いがあります。

学生に伝えたいことは？

若い人にもっと「農業」に関心を持ってほしいですね。就活をする学生を見ていると、農業がそもそも選択肢にも挙がらない人が多い気がしています。その道に進まなくとも、ちょっと考えてほしいと思いますし、この授業を通じて、農業を自分の将来の選択肢の一つとして考えるようになってくれれば非常にうれしいです。

地域連携

桜美林大学では地域社会との連携を大学を軸に強化することで、本学のリソースを継続的に提供し、「地域密着型大学」および「地域拠点大学」を目指しています。(桜美林学園2024年度事業報告書より)



小学生向け公開イベント

桜美林大学環境研究所は、2011年度より毎年、小学生に向けた理科・環境教育公開イベントを実施しています。2025年度も、3月29日に、「こどもサイエンス教室」を開催しました。

「こどもサイエンス教室」

境川クリーンアップ作戦への参加

2024年9月28日に行われた、相模原市・町田市が後援する「境川クリーンアップ作戦」に本学から学生と教職員合計313人が参加しました。

このイベントは、町田市と相模原市の間を流れる境川の清掃活動を通して、環境保全だけではなく、生活圏や経済圏を共有する町田～相模原の行政区画を超えた交流とまちづくりを目指した活動です。この活動を通じ、本学がキャンパスを置く、町田・相模原両市の近隣自治会や他参加団体の方々との交流が生まれました。



私も桜美林大学の卒業生で、学生時代に境川クリーンアップ作戦に参加したことがあります。友人と川に入りごみを拾うという貴重な体験がとても楽しかったことを覚えています。大学の友人と、大人が見守っているなかで楽しみながら地域に貢献するということは、良い経験になると思います。
(地域・社会連携課 松村さん)



探究サービスラーニング(多文化共生)

多文化共生とは、「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」(総務省:多文化共生の推進に関する研究会報告書)とされています。多文化共生は、SDGsの「4 質の高い教育をみんなに」、「10 人や国の不平等をなくそう」をはじめとする多くの項目とも関わるもので

桜美林大学リベラルアーツ学群には、多文化共生プログラムがあり、さらに多文化共生社会の担い手となる日本語教育人材を養成するための「日本語教員養成課程」もあります。

このような大学のリソースを活かす地域連携の例として、「探究サービスラーニング(多文化共生)」について紹介します。活動内容、今後のビジョンなどを担当の滝澤美佐子先生にインタビューしました。



担当教員インタビュー 滝澤美佐子先生

探究SL(多文化共生)担当



具体的な活動内容は?

外国につながる子ども達の学習・交流の場や、縁あって日本で暮らす難民などの自立支援をする団体において、未就学児、小学生、中学生を対象に、**日本語支援のボランティア**を行います。

具体的には、就学前の子どもなら居場所づくり、小中学生なら宿題のお手伝いなどを行っています。

活動先によって異なる学習支援の目的に応じ、日本語での日常会話がつたない子供たちには教育よりも日本語支援という形で関わっています。

学生はどのように頑張っていますか?

日本で生まれ育っていれば小学校入学前にひらがなを書ける児童がほとんどですが、外国人の子どもも日常会話もままならないので、就学しても授業についていけず、その差を埋めるための教育もありません。そのため、**国語ではなく言語学習**という、私たちの行っているような学習支援が全国に必要になっていると思います。

大学が地域とかかわる意義や地域からの評価は?

大学が地域とかかわることで学内だけでは学べないことが学べます。また、社会に出ることで自分の行動に責任をもつようになり、社会に対して貢献できることは何か考えられるようになります。実際、授業が終わった後も自主的にボランティアを続ける学生もいます。

地域からは良い評価をたくさんいただいています。活動先の中には、ボランティアの数が少なく、桜美林大学の学生がいないと困ってしまうという場所もあります。そのため、今後も責任をもって活動していきたいです。

今後のビジョンをお聞かせください!

現在、このような日本語の支援は国や自治体の事業として実施しているところがとても少ないです。市の施設を使用していたとしても、運営はボランティアで成り立っていることがほとんどです。**学生には、活動のその先をどのようにして持続させるか**を考えてほしいし、自治体は学生に任せることではなく、もっと積極的に充実した体制をとる必要があります。

私たちが関わる一つの小さな教室から、**多文化共生が地域の「学びあいの空間」**になるような環境を醸成していくと考えています。

環境報告書を 読んで

ビジネススマネジメント学群 学群長 五十嵐元一先生

桜美林大学ではキャンパスの分散化が進みました。環境報告書により各キャンパスの資源の利用や環境負荷の現状と対策について知ることができます。

都心にある新宿キャンパスは、キャンパス全体が1つの街であるかのように空間のフレキシブルな活用により、キャンパス全体を学修の場としています。

また、太陽光発電システム、冷暖房の負荷低減に有効なクールヒートトレインチ、壁面緑化、トイレの洗浄水に雨水等の再利用など自然エネルギー資源を有効利用しているエコなキャンパスもあります。

環境報告書では、リサイクル率が他のキャンパスと比較しても高く、それは粗大ゴミの排出がないためと分析されています。新宿キャンパスは開設7年目を迎ましたが、館内の清掃も行き届いており、来訪される方々から「きれいなキャンパスですね」と言われます。このキャンパスに集う全ての人々がきれいに使おうとする意識の表れを感じています。

その反面、学生一人当たりのエネルギー使用量が他のキャンパスより高い状況にあります。放課後の教室の照明がついたままになっていることもあります。節電に努めたいと思います。そして、これからも人と環境に優しいキャンパスであり続けるように、施設を活用しながら魅力的なキャンパスを皆で創って参ります。

最後に、今般の環境報告書の発行に尽力いただいた、リベラルアーツ学群の藤倉まなみゼミの環境報告書編集委員会の学生諸君に敬意と感謝の意を表します。



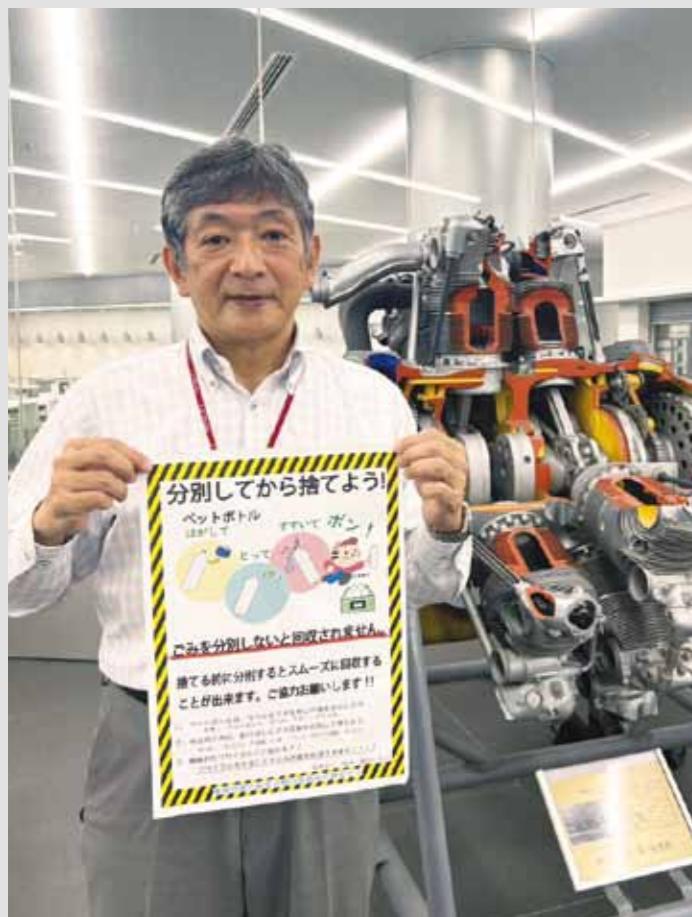
航空学群 学群長補佐 相原弘明先生

3年前に大学のHPを見て2018年度を最後に環境報告書が発行されていないことを知り、残念に思っていました。今回7年ぶりに2025年度の環境報告書が、学生の皆さんを中心となって作成・発行されたことを大変嬉しく思います。今回の報告書では、二酸化炭素排出量などのデータが5つのキャンパスごとに色分けされたグラフで表示されており、各キャンパスの特徴、分析が大変わかりやすく記載されています。

エコ施設に関しても5つのキャンパスについて写真付きの説明があり、またイラストを活用して一人当たりの使用量を「見える化」している点は、学生らしいアイデアだと感じました。イラストといえば、町田キャンパスグリーンマップの花のイラストは繊細で心が癒されます。環境の学びと地域連携の記事もカラフルで見やすく、サービスラーニング科目のインタビューは大変参考になりました。

今回の報告書では全キャンパスがカバーされており、どのキャンパスの学生、教職員にとっても環境への取り組みを身近な問題として考える良い材料になると思います。そのためにもこの報告書を多くの学生、教職員に読んでもらうことが重要です。私も航空学群内でしっかり宣伝したいと思います。

環境報告書は、5つのキャンパスの学生と教職員が協力して、継続的に発行することが望ましいと思います。次回の報告書では航空学群からも記事を提供できるよう頑張ります。2025年度の環境報告書の作成に携わった皆さん、すばらしい報告書の作成ありがとうございました。



エコキャンパスに向けた取組を知らずに、何気なく大学に通っていました。今回報告書を読む機会をいただき、こういった取組の一つ一つが私たちの大学生活を作り上げていることを実感致しました。取組に感謝の気持ちを持つ学生が増えることで、限りある資源を大切にする意識が高まると感じます。学校全体でエコキャンパスを実現していきたいです。

(表紙・裏表紙イラスト担当)
芸術文化学群4年 春日あろは

環境報告書というものにあまり馴染みがなかったのですが、今回初めて完成品を拝見し、編集力と企画内容の豊富さに驚きました。今回の活動において、提供させていただいた資料素材が少しでもお役に立つことができていれば幸いです。作成お疲れ様でした！

(町田キャンパスグリーンマップ花のイラスト担当)
芸術文化学群4年 嶋田莉子

編集後記



2018年度を最後に発行が途絶えていた環境報告書が、今年ようやく復活しました。

再開にあたっては、過去の形式や内容を見直しながら、今の私たちの取り組みをどう伝えるかを4人で何度も話し合い、悩みながら模索しました。現場での気づきや改善の工夫を図表や文章に落とし込み、読み手の視点を意識して丁寧に仕上げています。久しぶりの発行に不安もありましたが、完成した今は、嬉しさと感謝の気持ちでいっぱいです。

私自身この報告書づくりを通して、環境と向き合うことの意味や仲間と協力することの大切さを改めて実感しました。

この一冊が、誰かの気づきや行動につながることを願っています。読んでくださって、ありがとうございます。

リベラルアーツ学群3年 田島和人

1年生の時に本学の環境報告書を初めて読み、学生が作成に携わっていることに驚きました。現在、自分もこのように環境報告書を作成していることが、とても感慨深いです。また、支えていただいた先生方や他のメンバーのおかげで、無事完成させることができました。ありがとうございました。

7年分の非常に多い情報量をまとめること、また学生や大学関係者の皆さまへ読んでもらうために何をすべきか、作成する立場になり改めて難しさを感じました。

私自身、この活動をしていなければ気がつかなかった、本大学の取り組みがたくさんあります。本書を読んでくださった方々の気づき、そして環境に興味を持つ入り口になれば幸いです。

リベラルアーツ学群3年 德永莉子

学生主体で環境報告書を作成するという取り組みは、私たちにとって大きな挑戦でした。何から始めるべきか手探りの状態からスタートし、取材・編集・デザインなど、それぞれの得意分野を活かしながら協力し合い、少しずつ形にしていく過程で多くの学びを得ました。一方で、限られた紙面の中でどのように情報をまとめ、読みやすく伝えるかという点には大変苦労しました。特に、読んでもらえるような配置や文章を考える作業は難しくもあり、学びの多い経験となりました。

この報告書が、読んでくださる方々にとって環境への関心を深めるきっかけになれば幸いです。最後に、ご協力くださった先生方や職員の皆様、そして共に活動したゼミの仲間に心から感謝申し上げます。

リベラルアーツ学群3年 保崎瑚美

実に7年ぶりとなる本大学の環境報告書はキャンパスの分散化による大学の運営体制が大きく変化したことが盛り込まれている点が特徴としてあげられます。多様な学びに対応するため、学群ごとにキャンパスを分散することで各分野での課題点も多様化していることが見えてきました。また、コロナ禍を経験した世代として、時代の変化に応じて視点を柔軟に切り替えることが、持続可能な社会の構築に欠かせないと実感しています。

2018年以降の空白期間があったからこそ、見えてきた「変化」は、これからの時代を生きる私たちにとって大きな気づきとなりました。

本書によりこの気づきが少しでも多くの人に伝わり、環境をより身近に感じるきっかけとなれば幸いです。

リベラルアーツ学群3年 田中颯太郎

参加した感想

(芸術文化学群の学生)

J. F. Oberlin University



表紙は、ハイブリットバス・太陽光パネル・分別ごみ箱の設置・屋上緑化・キャンパス内の桜などの木々を増やした、環境に配慮したエコキャンパスを表しています！

裏表紙は、環境に配慮していないキャンパスを描いており、学生一人一人がこんなのがあったらいいなと構想しているイラストです。

みんなの気づきが快適で環境にやさしいキャンパスライフにつながることを願っています！

2025年11月

編集・発行：桜美林大学環境報告書編集委員会（リベラルアーツ学群藤倉ゼミ内） 編集協力：桜美林学園 施設管理部
発行協力：桜美林学園 総合企画部 広報課 〒194-0294東京都町田市常磐町3758 <http://www.obirin.ac.jp>